

## 鹿児島の昆虫 64

おもして蛾 <sup>が</sup> その2

昆虫担当 中峯 敦子

今回、企画展を通してたくさんの来館者の方々と話す機会がありました。その中で蛾は「色が地味。」「夜、明かりに集まってきて気持ち悪い。」「粉が飛ぶ。」「刺す、毒がある。」などの声が聞かれ、改めて蛾は残念なイメージをもたれる昆虫なのだとすることを再認識しました。でもそのことにとらわれて鹿児島に 2,000 種余りいる蛾の魅力に触れないのはもったいない。今回は、展示室でよく質問されたお話をまとめました。

(タイトルの「おもしてが」は鹿児島方言で「面白いね。」という意味です。)

Q：蛾とチョウ、どこがちがうの？

A：蛾とチョウは同じ祖先をもつ同じ仲間  
で、区別するのは難しいのです。

今から約 2 億年前のジュラ紀後半から白亜紀前半の地層から蛾やチョウの祖先と思われるチョウ目（鱗翅目）の化石が見つかります。祖先は今のトビケラの仲間に近かったといわれています。

その後、彼らは繁栄を遂げ、現在地球上にチョウ目の昆虫が 16 万種以上もいるといわれています。そのうち「蛾」は約 14 万 2,000 種。これに対して「チョウ」は約 1 万 8,000 種で、圧倒的にチョウより蛾が多いです。

蛾とチョウ。どこが違うのでしょうか。よく言われるのが下記のような区別点です。

- 「蛾は夜飛ぶが、チョウは昼飛ぶ。」  
…キオビエダシャクのような昼行性の蛾もいます。



花に訪れたキオビエダシャク（蛾）

- 「蛾は翅を水平や屋根型にして止まるが、チョウは翅を立てる。」  
…キタテハのように翅を水平にして止まるチョウもいます。



葉に静止するキタテハ（チョウ）

- 「蛾の触角は糸状や櫛毛状だが、チョウの触角は先が太くなり直線的。」

…やや当てはまりますが、慣れないと見分けがつきにくいです。

イチジク  
ヒトリモドキ(蛾)



触角

ルリタテハ  
(チョウ)



結局、蛾もチョウも「卵→幼虫→蛹→成虫」（完全変態）の成長過程があり、成虫のからだと翅が鱗粉でおおわれている」という共通点がある昆虫であることは確かです。それ以上、明確に区別することはできません。

フランス語では蛾もチョウも「パピヨン（Papillon）」というそうです。つまり彼らを昼見かけたら「昼のパピヨン」、夜見かけたら「夜のパピヨン」というのだそうです。蛾だ、チョウだと分けずに眺めてみませんか。

